

住

sumu

Quarterly Magazine

Autumn

2007

季刊 秋 NO.23

すみ

「農」ある
暮らし。

特集



松原長田連載
山巖弘歩
大橋研哉



特集

「農」ある

暮らし

高野 孟の 半農牧半電腦的 暮らしおの家

豊かな里山で、朝は畑を耕し、草刈り、森の小径で山菜や筍を狩る。窓外に遠く山並みが連なる書斎で原稿を書く。飽ければまた野に出て、夕べには自然の恵みを肴に近隣の農家の人々や友人たちと宴を開く。必要があれば車を駆つて東京に出かけて行く。ジャーナリスト高野孟さんは、そんな生活を目指して、今春、千葉県鴨川に居を移した。暮らしは始まつたばかり。まだ畠もできてないが、そうした暮らしと生き方に相応しい家のありようを探つた。

文・高野 孟

写真・飯貝拓司

たかの・はじめ
ジャーナリスト。1944年東京生まれ。1968年早稲田大学文学部西洋哲学科卒業。
「インサイダー」編集長。2005年ブログサイト「さ・こ・も・ん・す」を創設。
著書に『地域市民の読み方』、『減びゆくアメリカ帝国』など多数。
テレビのレギュラー出演は、TVA朝日「サンデープロジェクト」、大坂読売TV「情報ライア・ミヤネ屋」

千

葉県鴨川、
房総山地
の奥深く

にある農事組合法
人「鴨川自然王国」
に、月に一、二度、
一泊か二泊で行つ
て、農林作業の真
似事をするようになつて十数年が経
つ。私がこういう
暮らしが始めるきっかけは、学
生時代からの知り合いだつた藤
本敏夫（故人）との再会であつ
た。「21世紀の日本は農と環境
が最大のテーマだ」という藤本
と語り合うなかで、共に「国民
皆農」時代を切り開くために第
二の人生を捧げようと思うよう
になつていた。

鴨川は都心からも住まいのあ
つた横浜からも、東京湾アクア
ラインを通つて車で一時間半と
いう近さでありながら、そこには
は日本の農村の原風景と言える
棚田をはじめとする里山が広が
つていた。「東京近郊にこんな
ところがあつたのか」と感動す
る。しかし、ひとたび中に分け
入つて見れば、超過疎の村々、
放棄されて荒れ果てた田畠、手
入れされずに真っ暗になつた森
など、触れるものすべてがほと
んど半死状態であることに胸が
引き裂かれた。放つておけない
気分に駆り立てられてそこに通

暮らしを始めるきっかけは、学
生時代からの知り合いだつた藤
本敏夫（故人）との再会であつ
た。「21世紀の日本は農と環境
が最大のテーマだ」という藤本
と語り合うなかで、共に「国民
皆農」時代を切り開くために第
二の人生を捧げようと思うよう
になつていた。

暮らしを始めるきっかけは、学
生時代からの知り合いだつた藤
本敏夫（故人）との再会であつ
た。「21世紀の日本は農と環境
が最大のテーマだ」という藤本
と語り合うなかで、共に「国民
皆農」時代を切り開くために第
二の人生を捧げようと思うよう
になつていた。



(1)

その間、いざれはこういう山
深いところに居を移して、もう
少し本格的に田舎暮らしを始め
たいという思いを抱き続け、終
の棲家というか、第二の人生の
本拠地として自分で納得のいく
土地を見いだすこととした。し
かしそれは簡単なことではなく、
数年かかつたが、結果的にはむ
しろよかつたと思う。何年も通
い詰めているうちに地元に知人
や友達が出来て、さらには夏祭
りでは毎年、御神輿担ぎを買つ
て出て、村の長老たちとも顔見
知りになり、そういう人の繋が
りを蓄えながら少しずつコミュニ
ティに溶け込んでいくことが
出来たからである。



(6)

(5)

(4)

(3)

(2)

(1) 藤本敏夫氏（中央）らと
森林の下草刈りから戻って。
1998年。(2) 鴨川の大山千枚田。
3.2haに375枚の田んぼ。(3)
里山帰農塾で田植えをする高野
さん。(4) 南側はデッキ（セラ
カンパツ材）が大きく張り出し
ている。以前からあった岩（手
前）はそのままに。(5) アプロー

チと西側外観。厚い無垢ナラ材
の玄関扉が人を迎える。(6) 玄
関内から見る。(7) 西側の小高
い森から家の向こう遠くに山並
みを望む。屋根はガルバリウム
鋼板、外壁は漆喰と杉板。(8)
樅、櫻などの樹々の間に見え隠
れする家。(9) 樅の大樹の下で。
高野孟さん千織さん夫妻。

緑の濃さが増してゆき、敷地全
体に春らしい風が吹き渡る。土
地の古老に聞くと、昔はその樅
の若葉を尊び、少しだけ摘んで
ご飯に混せて炊き、春の訪れを
味わつたのだという。敷地の入
り口近くには、樹高15メートル
の大きな夫婦樅が、根元がくつ
つきそうに寄り添つて、空を覆
うほど颯爽と枝を広げている。
まるでこの敷地のシンボルのよ
うな風情である。

敷地の北側は一段上がつた畠
地で、その両脇から上方にか
けては広葉樹の大木の林が広が
り、そのまま大山不動尊の杜に
接している。東は、大きな樅や、
隣地との境の目印だという柿の
木があり、その周りは雑木林に
なつている。なるべく木は残し
て、樅ごとに朝日が入るように
している。西は道路に向かつて
下つていく斜面で、そのまま隣
の森に繋がる巨木群がある。南
は緩やかな下り斜面の草地で、
街道の反対側の清澄山系の見事
な眺望が心をなごませる。

南房総、鴨川という「場所」

い、農作業や森林整備作業に取り組むようになり、やがて棚田植え・稻刈りをし、大豆を蒔いて育てて味噌を作り、年間日程を立てて都市と農村を往復する暮らしが始まつたのである。

田保全のトラストを組織して自分たちで田植え・稻刈りをし、大豆を蒔いて育てて味噌を作り、年間日程を立てて都市と農村を往復する暮らしが始まつたのである。

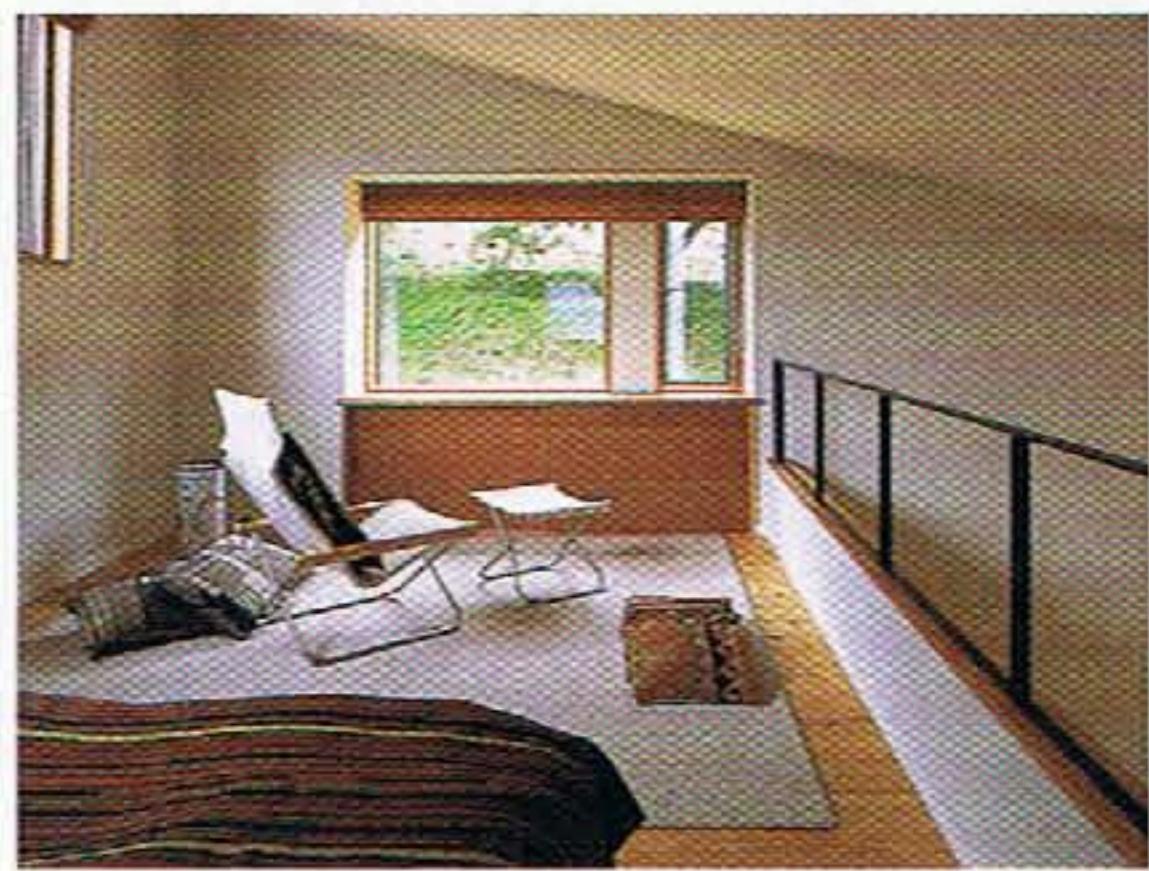
い、農作業や森林整備作業に取り組むようになり、やがて棚田植え・稻刈りをし、大豆を蒔いて育てて味噌を作り、年間日程を立てて都市と農村を往復する暮らしが始まつたのである。



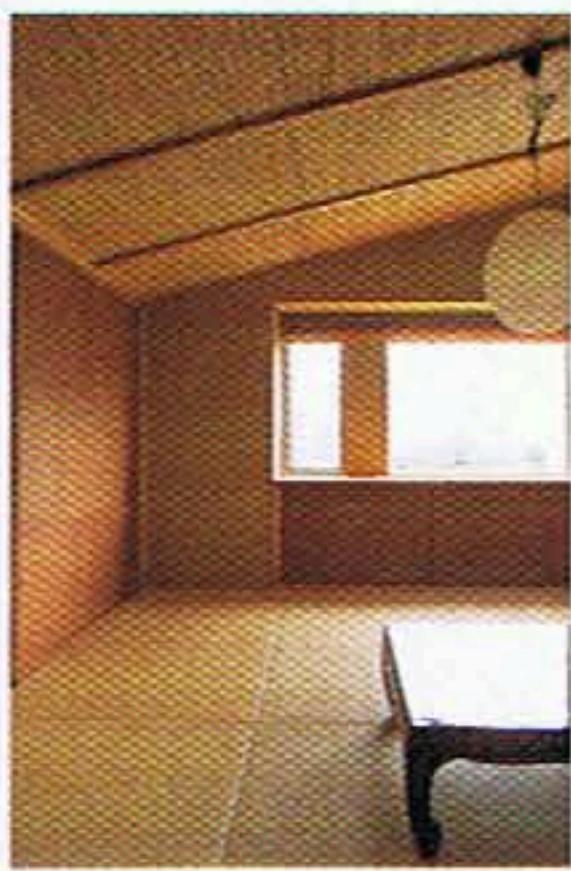
の家の間取りの基本
は、日本の伝統的な民
家の「田の字型」に準

拠しており、中心となる生活空間は一階の約半分を占める広い土間である。

田の字型の民家というのは、家の三分の一から半分が三和土の土間で、そこに台所の水場と竈、農作業のスペースがあつた。一段上がって、囲炉裏を切つた板の間があり、そこは三度の食事や家族の団欒、あるいは夜なべ仕事のスペースであると同時に、近所の人が遊びに来たり村の長老が相談事に訪ねてきたりすれば来客接待のスペースにもなった。その板の間と、奥の座敷、その裏の寝室、納戸など土間以外の部分が、おおむね田の字型に配置されているものである。改また客は座敷、近所のお付き合いは縁側に腰掛けたり囲炉裏を囲み、そして土間は最も外に近いスペースで山や畑や庭、ご近所と繋がっている。つまりは日本の民家というのは、そのようにグラデーションをして「外」に向かつて開かれていた。



(4)



(3)



(2)

(1)

(1)居間の飾り棚。(2)大黒柱を想わせる栗の柱。(3)ロフト階の和室。天井は晒し竹。(4)居間・食堂と吹き抜けで繋がる洋室。床は杉。(5)1階は磁器質タイルの床が連続して土間のイメージ。壁・天井は珪藻土ブランスター。(6)居間の南東コーナー。天井高を抑えて落ち着き

を。コルビュジエのLC1スリングチェア2脚。壁には骨董店で見つけた欄間。千織夫人のインテリアセンスが光る。(7)玄関ホール。小さな天窓からの光が額絵(京都の和紙店「唐長」で特注表装)を際立たせる。(8)囲炉裏テーブルとキャンティーバーチェアの組合せが新鮮。

家づくりにあたつて、故・水上勉の『土を喰う日々』を再読して、得たことを記しておこう。これは、軽井沢に仕事場を持つ水上が、敷地に野菜畑を作り、周りの山野を歩いて山菜や木の実を取り、自然の恵みを味わい尽くす一年十二ヶ月の食の暦である。九歳で京都の禅寺の小僧になつた水上に老師が教えたのは、台所の脇にある三畝ほどの畑に相談して、材料が乏しい冬であつても知恵を絞つて、毎日のように訪れるお客様のために二、三の酒肴や惣菜を調えるこ

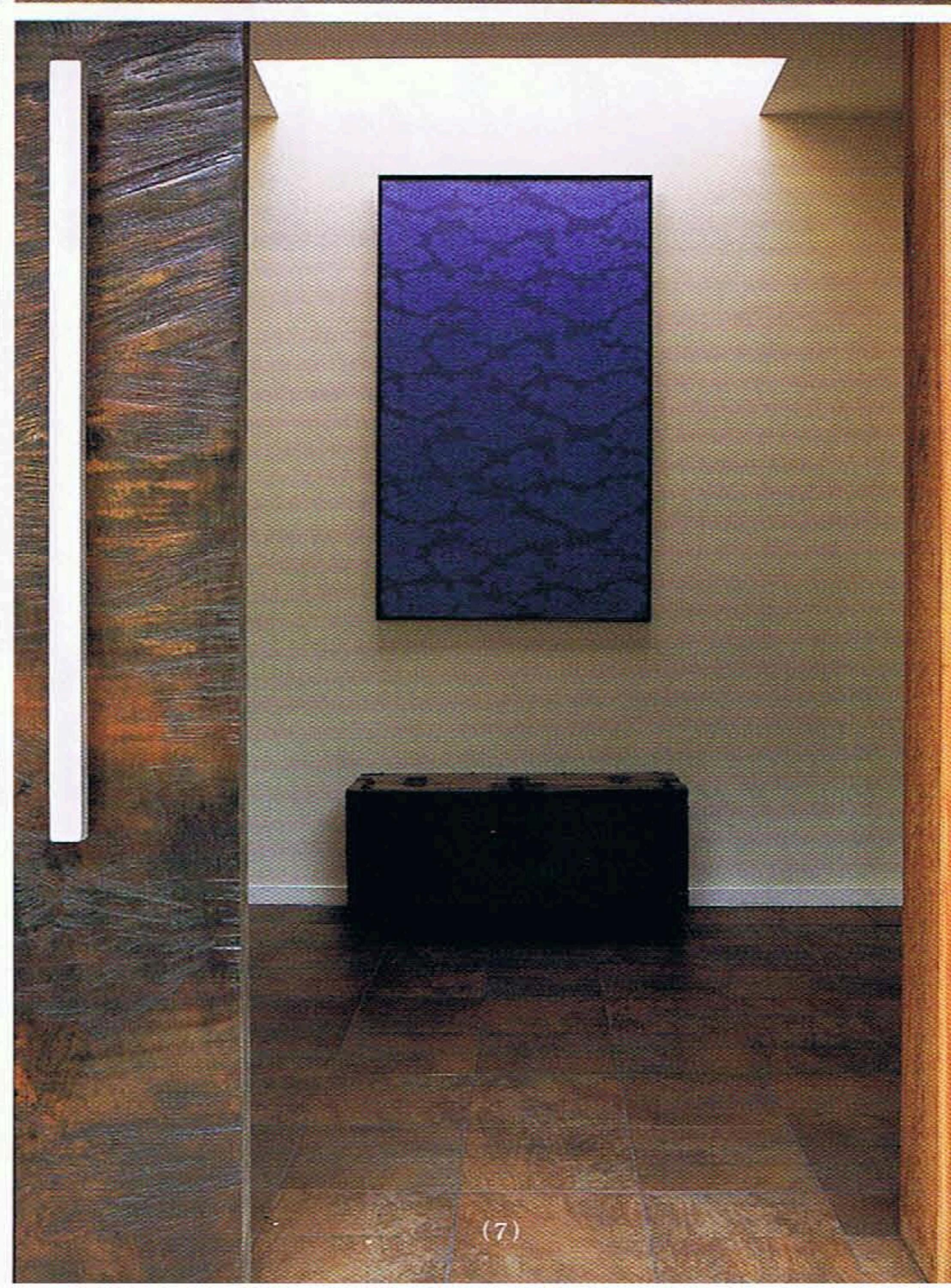
は、泥だらけの靴を洗つたり、採つたばかりの野菜を水桶に放り込んだり出来る外流しを設け、土足で入つてこられる土間を大きくとつた。土間は苦汁で土を付き固めた本格的な三和土にしたかったのだが、土地の人にくと、金属製品が錆びて酷いことになるので止めた方がいいということで、タイル張りにした。現在は土足ではなく、上足に履き変えているが、根底には土間の精神を失つてはいない。

私はそれが日本の家の基本だと思うので、簡単に言えば、近所の農家の友達がやつてきて、そのまま「高野さん、いる?」と入つて来られるような家にしたいと考えた。だから玄関脇に

とだつた。何もない台所から絞り出すのが精進で、「これは、つまり、いまのように、店頭へゆけば、何もかもが揃う時代とちがつて、畑と相談してからきめられるものだつた。ぼくが、精進料理とは、土を喰うものだと思つたのは、そのせいである。旬を喰うこととはつまり土を喰うことだらう。土にいま出ている菜だということで精進は生々しくて土と結びついていなければならぬ、とするのが、本孝老師の教えた料理の根本理念である」。

台所が土に繋がつているという台所が土に繋がつているといふのは、単に家をそれらしく設計するという外面の話ではなく、野菜やそれを育てた土が泣くのを感じられる感受性を、自分の暮らしの基礎として取り戻すかどうかの内面の問題である。さあ何を食べようかという時に、まずコンビニに走るのではなくて、裏の畑に相談するという暮らしづらしが、家のかたちを決めるのである。

外に向かつて開く 「土間」



居

間・台所・客間を兼ねる土間の重心は、友人の木工作家、馬場健二さんの手になる巨大な原木を用いた三角形の「囲炉裏テーブル」である。じつは、このテーブルをドーンと真ん中に据えるのにふさわしい家をつくりたい

というのが、私のそもそもの発想の原点でもあつた。大テーブルが三角形なのは、馬場さんの一種のコミュニケーション理論によるものである。八人から十人が座れる大きい長方形のテーブルだと、飲んだり食べたりするうちに必ず右側と左側とで話が分かれてしまう。ところが三角形で、しかも真ん中に「火」があると、常に全員がお互いの顔が見えて、なつかつ火の求心力が働くので、どんなに酔っぱらつても話がバラバラになることがないというものだ。

居間の西の壁際には、大型の本格的な薪ストーブがある。薪の材料は家の周りにいくらでもあるし、薪割りの斧はとつくに用意してある。いずれは薪小屋を造ることも計画している。

土間の一角には台所もあって、そこにもプロパンガスの生の火がある。私は昨今の「オール電化」には大反対で、家の中に生の火がなくなつてしまつたら家庭も家族も成り立たないと思っている。確かに、老人や幼い子

供がいれば、生火がないほうが安全だろうが、しかし生火を家中からなくしてしまうことによるデメリットは計り知れないものがあり、それこそが家族崩壊、教育破綻の原因ではないかとさえ思う。

縄文の昔から人は火を真ん中に置いて暮らしてきて、それは単に煮炊きや暖房の利便のためではなく、それを中心にして家族というものが成り立つ精神的な意味があつたのだと思うが、今は、焚き火の火ひとつ着けられない人が少なくない。「焚き火」そのものが違法であるかのような変な常識がまかり通っていて、その理由はと問えば「ダイオキシンが」と。しかし、産業用資材の燃焼による大量のダイオキシン発生と較べれば、家庭の焚き火や薪ストーブで出るダイオキシンなどはほとんど取るに足らないもので、法律は家庭の焚き火を禁じたりはしていない。庭を掃いて落ち葉焚きをして、そこで芋を焼いたりするのは日本的情緒の一部である



(1)



(5)



(4)



(3)



(2)

(1) 台所から勝手口へ。(2) (3) 囲炉裏テーブルは炭火で。鍛鉄の自在鉤をセットして鉄瓶や鍋を吊る。炉を使わない時は左頁のように竹簾が載る。(4) (5) プロパンガスの火で揚げ物。アイランド部分はトヨーキッチン。(6) 馬場健二氏デザインの松材の囲炉裏テーブル (250

× 210 × h68 · t7 cm) で昼食。高野さん夫妻と並んで、帰省中の娘千冬さん、右側は鴨川自然王国の藤本ミツヲ、八重さん夫妻。手前は馬場さん、夫人の妹さん。火がよく見える薪ストーブ (ベルギー製/京阪エンジニアリング)。シャンデリアはイタリア製 (トヨーキッチン)。

欠かせない「火」の役割

し、そういうことを通じて子供の感性を鍛えたほうがよい。

近所の人々が来ると、囲炉裏テーブルでお茶かお酒かを啜ることになる。寒い季節ならば、薪ストーブに火が燃えていて、たいていの客は自分で薪をくべたがるだろう。それこそ思う壺で、薪をくべるだけでなく薪割りと一緒にやって一汗かきませんかと説くことにしよう。さらに、居間の南側には広大なデッキがあり、冬以外はここで客を迎えることになるだろう。その脇には、七厘、バーベキュー炉、洗い場などがあつて、いつでも野外パーティを始められる。

遠くの景観、村の人々、林道、敷地の木立、畑、前庭、デッキは少しづつ段差をなしながらもそのまま土間に繋がつていて、土間は内でありながら外の一部でもある。その土の流れに沿つて、デッキ、土間の薪ストーブ、囲炉裏テーブル、台所、それぞれに生きた火があり、それらは微妙に繋がりあって、もてなしをするというわけである。

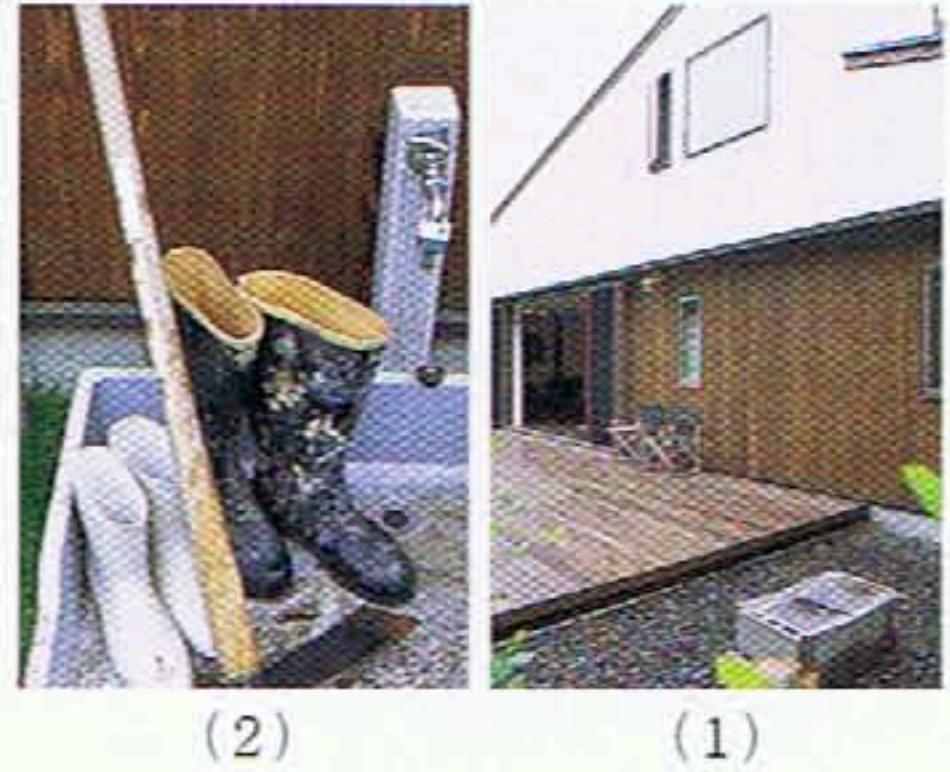


私

が始めつつあるのは、「半農半X」の自分流の形としての「半農牧半電腦」の暮らしである。「農」とは、ここから車で五～六分の距離にある鴨川自然王国で取り組んできた米作りを中心とした農作業や都市農村交流の活動を続けつつ、自分でも家の脇に小さな畑を作つて自給自足度を高めることである。「牧」とは、いざれ馬を飼つて周辺の山々を乗り回し、あるいは近所の居酒屋に乗り付けたいという夢である。

帰りは、眠りこけても落ちさえしなければ馬が家まで連れて帰ってくれるはずだ。馬は道路交通法上、軽車両扱いなので、厳密には酒酔い運転になるが、今まで馬で検問に引っかかった事例は聞いたことがない。とはいって私が全国を飛び回つて月の半分も留守にしているようでは、馬の世話が出来ないので、もう少し落ち着いてここで過ごせるようになつてから実現を図りたいと思っている。

「電腦」とは、ネットを通じて連絡しあつたり、調べ物をしたり、原稿を書いて送つたりして仕事をすることで、この僻地には光ファイバーが届く予定は全くの未定なのが残念だが、基地局が近いのでADSLでもさほど回線速度に不満を感じることはない。この半農牧半電腦的生



(1) (2)



(6) (5)

(4) (3)



(1) デッキ手前にはコンクリートブロック製のバーベキュー炉。(2) デッキ脇に設けた外流しには長靴や農具が。(3)「この下に杉チップを使用したバイオ浄化槽が入っています」。(4) コンポスト。生ゴミはここに。(5) 西側隣地にある水源。(6) 中古の牛乳運搬用タンクを利用した

巨大な貯水タンク。手前は自製のパイプ型濾過器。(7) 視界が開けた書斎。座り心地のよさに定評のあるハーマンミラー社のアーロンチェアで。壁・天井は珪藻土ブロスター。床はブラックウォールナット。(8) 寝室。ベッドから窓外を見ると、樹々の向こうには遠く山並みが。

活が成り立つのは、电脑で仕事が出来るからで、その根拠地としての書斎は、機能的合理性と環境的快適性に徹底的にこだわった。

家の北東の角に位置する書斎は六畳で、北に面した長辺に大きな集成材のデスクが据え付けてある。椅子に座った位置からは約一八〇度の緑の景観が目にに入る。北に見えるのは、房総山地の中心部である清澄山系の山並みである。広葉樹にところどころ竹と杉が混じるその山々は、朝夕の陽光がそれぞれに異なる陰影と色合いを見せ、昼間は南からの陽を受けて緑が映える。

パソコン画面を一時間見つめたら十分間は遠くの緑眺めて目を休めるといふが、まさにそれにピッタリの贅沢な眺望である。

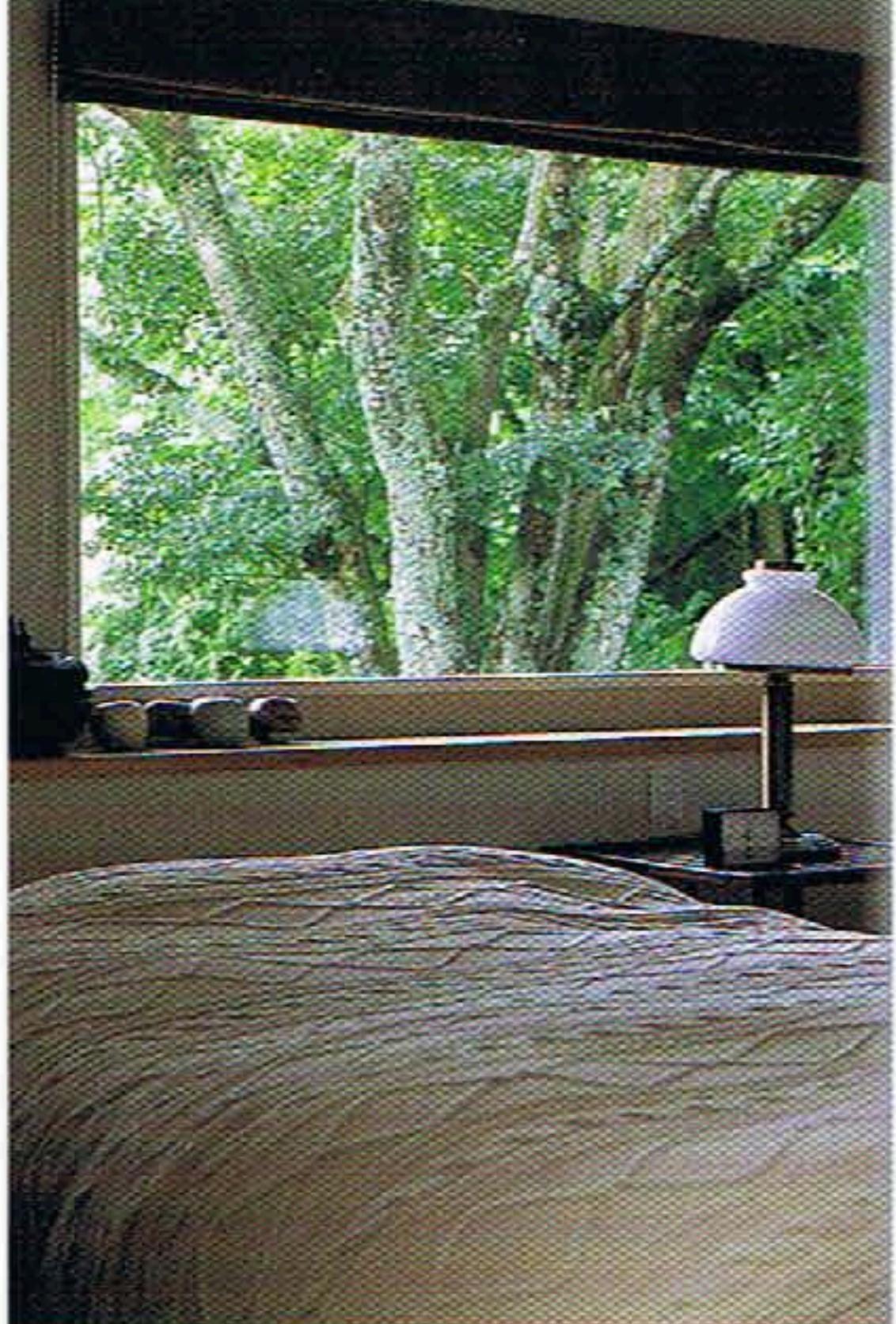
さて、この家で一番苦労したのは水のことで、いろいろな模索の果てに決めた。敷地から西の隣地に少しだけ入つたところに豊かな湧き水がある。これがわが家の水源である。地主の了

解を得てその水をパイプで引き、一度タンクで濁りを落としてから自製の濾過器を通して巨大なタンクに貯め、それをポンプで引き上げ、浄水器を通して家中に引いている。今はご近所の方々と試行錯誤の末に作り上げたパイプ型の濾過器を使つているが、将来は、ビオトープ型の大きな池を作つて土そのものの自淨力を活かした濾過に切り替える予定で、すでにその設計は出来ている。

排水は杉チップを用いたバイオ浄化槽に流れ込み、バクテリアの作用ですべてが分解される。その水はまた屋内に循環させてトイレなどの中水に利用する。つまり、上水も下水も自己完結しているのだ。

私にとっての鴨川移住は、土に根ざした人生二毛作の出発である。東京と鴨川を行き来する私の二都物語はしばらくは慌ただしいものとなるだろうが、それを通じて私の人生曼荼羅はさらに豊穣さを増していくだろう。

始まつたばかりの「暮らし」



(8)

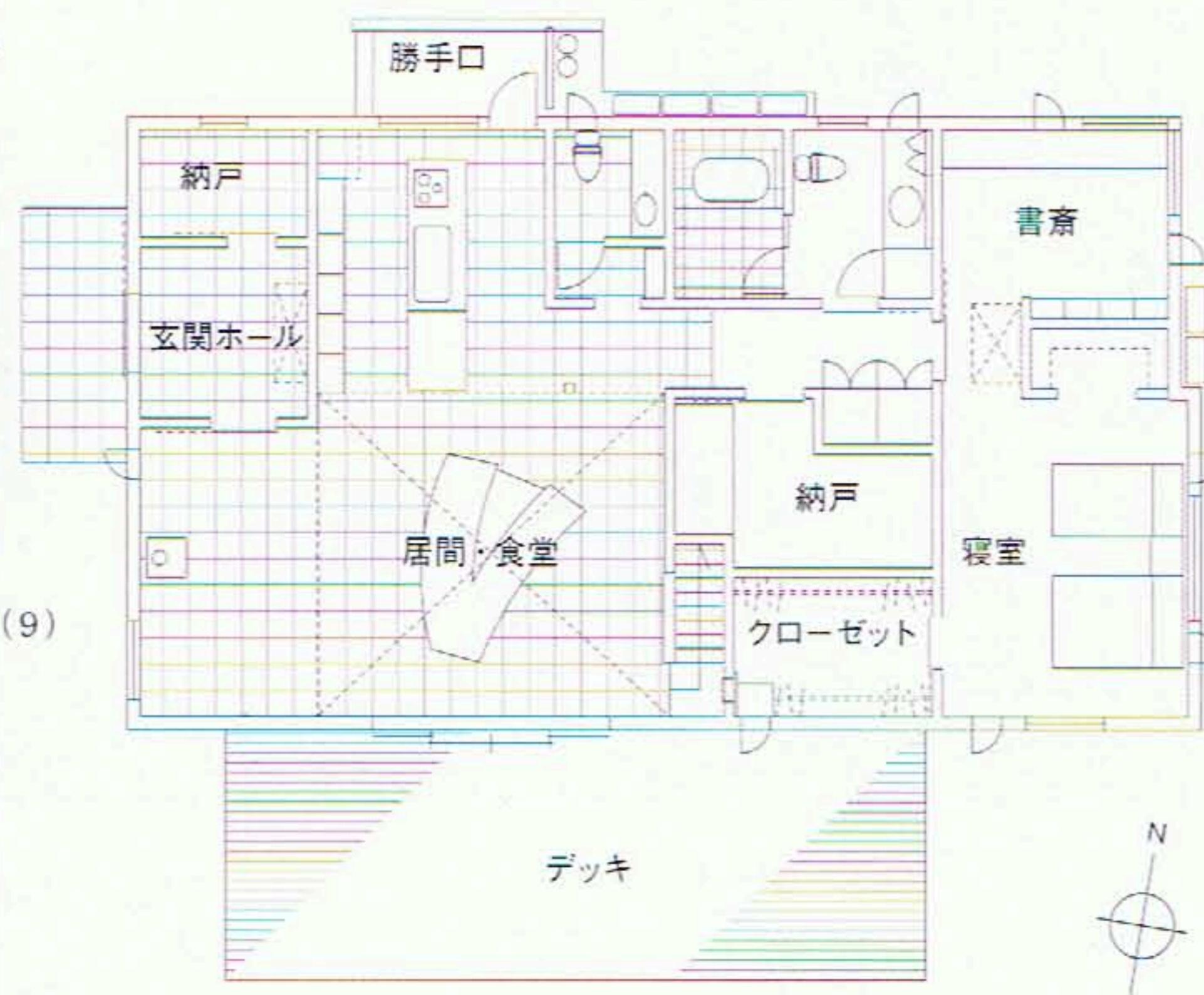


(7)

(9) 廊下が書斎(左)と寝室(右)を分ける。天窓からの光がやさしく降り注ぐ李朝筆筒に飾った石像(10)は、高野さんが敷地内を草刈り中に見つけた出土品。



(9)



data
 所在地 千葉県鴨川市
 家族構成 夫婦
 敷地面積 1,259m² (公簿)
 延床面積 182.52m²
 1階 146.42m²
 ロフト階 36.10m²
 設計 アーキテクトディザイン+ライズ
 (Tel 03-6825-5995)
 施工 藤森工務店
 竣工 2007年4月

1階平面図 1/200

*ロフト階は省略



(10)



鴨川自然王国

農事組合法人鴨川自然王国が主体となって運営する多目的農場。故・藤本敏夫が、里山の自然を背景に「食」と「農」を中心とする、自然共生型の「楽しい生活」を実践すべく始めた。王国会員(年会費1口1万円~)になると、月1回の王国主催のイベント(田植え、田の草取り、稲刈り、大豆栽培、ジャガイモ・サツマイモ植え、星空観察等)、鴨川自然王国の日常農作業に参加でき、会員で育てたお米を1口につき5kgと大豆(味噌でも可)がもらえる。休耕田を利用した

王国畑(写真)もある。里山での農的な生活を楽しむための方法を学ぶ教室「里山帰農塾」を年5回(2泊3日)開催。講師は、高野孟、鴨川自然王国代表理事・石田三示、歌手・加藤登紀子、『増刊現代農業』編集長・甲斐良治。

問合せは、鴨川自然王国事務局へ。

〒296-0237 千葉県鴨川市

大山平塚乙2-732-2

e-mail:kingdom@viola.ocn.ne.jp

tel:04-7099-9011

fax:04-7098-1560